

第7回キャリア教育アワード
エントリー事例集



2017年1月



経済産業省では、子どもたちに対し働くことの意義や学びと実社会とのつながりを伝え、社会的・職業的自立に向けた力を育成する「キャリア教育」の取組を推し進めています。

この一環として、産業界による優れたキャリア教育支援活動の取組とその効果を広く社会で共有し、こうした活動を奨励・普及・促進することを目的として、企業や経済団体等による教育支援の取組を公募し、優秀と認められる事例を表彰する「キャリア教育アワード」を実施しています。

審査部門は、各企業・団体の取組の主体により、①大企業の部、②中小企業の部、③コーディネーターの部で構成しており、審査委員会による審査を経て、大賞（経済産業大臣賞のうち総合的に最も優れた企業・団体等）、最優秀賞（経済産業大臣賞）、優秀賞、奨励賞を選出します。

2016年度は計37件の応募がございました。本事例集にて、各企業・団体の取組概要をご紹介しますので、ご参考にしていただければ幸いです。



（ご参考）「キャリア教育アワード」の審査基準

■大企業の部・中小企業の部

継続性	長期にわたり運営していくため、継続的に改善するサイクルが実行されているか
普及性	企業・団体の活動規模に応じた展開をしているか
汎用性	教育ニーズに対応できる取組となっているか
企画性	プログラムの内容に工夫があるか（目標設定、授業の進め方等）
キャリア教育としての教育効果	授業内容が、社会的・職業的自立に向けた力の育成支援となっているか

■コーディネーターの部

有効性	職業的自立に向けた教育効果の向上に貢献する支援サービスを提供しているか
支援実績	数多くの企業・学校・若者に支援サービスを適用しているか
産学関係構築への貢献	産学関係者が相互理解を深め、協働するための関係構築に貢献しているか

※審査基準の各項目の詳細内容は、巻末の〈参考資料〉第7回「キャリア教育アワード」募集要項をご覧ください。

目次

経済産業大臣賞（最優秀賞）受賞事例

大企業の部



<大賞※> 株式会社博報堂	4
---------------------	---

※経済産業大臣賞受賞者のうち、総合的に最も優秀と認められる企業・団体等

中小企業の部

認定特定非営利活動法人キーパーソン21	6
---------------------------	---

コーディネーターの部

一般社団法人九州インターンシップ推進協議会	8
-----------------------------	---

各部門のエントリー事例 応募総数 計 37 件

<大企業の部> 応募数 計 15 件

<優秀賞> キヤノングループ内8社	12
<優秀賞> 富士通株式会社	13
<奨励賞> 東京ガス株式会社	14
<奨励賞> 大日本住友製薬株式会社	15
JAIMA サマーサイエンススクール実行委員会	16
株式会社CBCテレビ	17
株式会社島津製作所、株式会社島津ビジネスシステムズ	18
株式会社ダスキン	19
コニカミルタ株式会社	20
広島ガス株式会社	21
テュフ ラインランド ジャパン 株式会社	22
公益社団法人全国求人情報協会	23
日本生命保険相互会社	24
東京ベイ信用金庫	25

＜中小企業の部＞ 応募数 計 17 件

＜優秀賞＞ 株式会社アトリエテンマ	26
＜優秀賞＞ 一般社団法人ドリームマップ普及協会	27
＜奨励賞＞ 東京商工会議所	28
＜奨励賞＞ 徳島県信用保証協会	29
＜奨励賞＞ 有限会社せれくと	30
株式会社スリーハイ	31
大阪府中小企業家同友会	32
熊日宮原販売センター	33
一般社団法人 Fora	34
一般社団法人日本ゆめ教育協会	35
公益社団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団	36
特定非営利活動法人じぶん未来クラブ	37
東京都社会保険労務士会 臨海統括支部 キャリア教育研究会	38
株式会社マグエバー	39
フジコーポレーション株式会社	40
エヒメ・ベンチャー・ネットワーキング	41

＜コーディネーターの部＞ 応募数 計 5 件

＜優秀賞＞ 特定非営利活動法人新宿環境活動ネット	42
＜奨励賞＞ 特定非営利活動法人グローバル人材開発センター	43
株式会社アジアリザレクション	44
特定非営利活動法人 WEBREIGO	45

＜参考資料＞

経済産業省によるキャリア教育への取組～キャリア教育コーディネーターの育成支援	10
第7回「キャリア教育アワード」募集要項	46
「キャリア教育アワード」受賞企業・団体一覧	51

大賞・経済産業大臣賞（大企業の部）

<p>企業・団体名</p>	<p>株式会社博報堂</p>
<p>プログラム名</p>	<p>博報堂オリジナルの教育プログラム「H-CAMP」 （①OPEN-CAMP、②企業訪問-CAMP、③外部とのリレーション）</p>
<p>活動の内容 （概要）</p>	<p>2012年の秋から冬にかけて、教育関連NPOや中学校・高等学校の教員の方々との対話を行う機会を得て、教育を取り巻く環境変化やキャリア教育ニーズに応えるため、2013年に博報堂はオリジナルの教育プログラム「H-CAMP」を発足させた。多くの教育関係者にヒアリングを行い、博報堂の創業理念や人材育成方針・ワークスタイルなどが、求められているニーズに合致すると判断しスタートした取り組みである。</p> <p>博報堂のビジネスの中核能力は「クリエイティビティ」である。複雑化する課題を解決し、新しい価値を創造し続けるためには、多様な個性を持つ人材づくりと創発の力によって生み出されるクリエイティビティが必要となる。博報堂が推進するキャリア教育の在り方を考えた時、「粒違いな個性の大切さ」と「お互いの個性を尊重しあうチームの力」を学生や若者に体験してもらい、クリエイティビティを学べる場を設けることがあべき姿との結論に至り、「H-CAMP」を発足させた。</p> <p>「H-CAMP」は、この博報堂のクリエイティビティを、体験を通して楽しみながら実感することを目指した3つのプログラムから構成され、キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」のすべてに高い効果をもたらすことができるよう設計している。</p> <p>①OPEN-CAMP：第一線で活躍している博報堂社員（プランナー、コピーライター、デザイナー等）が講師を務める、個人参加型の本格的な体験ワークショッププログラムである。</p> <p>②企業訪問-CAMP：学校のキャリア教育ニーズに応えるプログラムである。個々の学校のニーズや訪問する生徒の状況に合わせ、個別に内容変更をしながら対話型・体験型の場づくりを行っている。</p> <p>③外部とのリレーション：学校、NPO、自治体と連携しながら個別プログラムの開催や講義協力を行っている。</p>
 <p>OPEN-CAMPの開催写真</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上と左下の写真はグループごとの話し合いの様子 ・講座によってはパソコンを使って情報収集を行うこともある。 ・講座の最後にはグループや個人での発表の時間も必ず設けている。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・上は企業訪問-CAMPの開催写真 ・左下は企業訪問-CAMPの発想体験ワークの様子 ・下中央の写真は同郷社員からの仕事紹介の様子 ・右下は、外部とのリレーション（ゆめっと@博報堂）の様子

活動の内容 (詳細)	「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など
	「H-CAMP」事務局には専任担当者1名とアシスタント1名の2名体制で活動しており、事務局担当者は社員ネットワークと教育関連知見のハブ機能を担い、ニーズや状況に合わせて最適な人選やプログラムの設計を行っている。また、取組に対する経営層の関心は高く、経営層に現状、課題、今後の取り組み施策等について分析や整理、提案を行い、PDCAサイクルを推進している。H-CAMPに参加した社員や参加者からの知見や情報は、連携する社員や外部団体に随時共有して新たなプログラムづくりに活用しており、提供するプログラムの幅が広がり、進化を続けている。
	「普及性」についての具体的な取組、工夫している点など
	①OPEN-CAMP 2013年8月からスタートし、2016年10月23日現在で30回の講座を開催。1年間の開催は10回程度であり、毎回10から20名が参加している。
	②企業訪問-CAMP 2016年度は81校(来社生徒数1050)となり、アクティブ・ラーニングを重視した内容が評価されリピーター校が増え、学校間の口コミなどで認知が広がっている。
	③外部とのリレーション ①と②の活動を継続することで知見が蓄積され、NPOや地方自治体、学校からの個別の要望やリクエストに応え、幅広い対応の受け皿としている。
	「汎用性」についての具体的な取組、工夫している点など
	博報堂らしいキャリア教育のテーマとして、①1人1人の個性を育むきっかけをつくる、②対話を重視する、③アウトプット機会を必ずつくる、④多様でユニークな博報堂社員との交流機会をつくる、⑤お互いに学びあう、を掲げ、H-CAMP参加者や先生などからリアルな現状や課題をうかがい、さらなるブラッシュアップを図っている。
	「企画性」についての具体的な取組、工夫している点など
	H-CAMPは博報堂のビジネスの中核能力である「クリエイティビティ」を、体験を通して楽しみながら実感してもらうことを目指したプログラムであり、全体を通して、「人間関係形成・社会形成能力」や「イノベーション」を目標としている。
①OPEN-CAMP 中学生・高校生が個人で参加できる本格的な発想体験プログラムであり、デザイナー、コピーライター、プランナーなど最前線で活躍している社員が講師を務める。	
②企業訪問-CAMP 全国の中学校・高等学校からの訪問依頼に応え、できるだけ同郷の社員と生徒との対話や生徒同士の対話(話し合い)の機会をできるだけ持つようにしたプログラム。	
③外部とのリレーション 連携団体のニーズをうかがい、ワークショップだけでなく、講演やダイアログ、社員からの体験談紹介などを組み合わせたプログラムづくりを行っている。	
「キャリア教育としての教育効果」についての具体的な取組、工夫している点など	
異なる考え方や価値観を理解することの重要性や受け入れたり許容したりする心のあり方を学ぶ機会となり、他者の斬新な発想力や情報力、志の高さを目の当たりにして、「悔しさ」と「焦り」を芽生えさせる参加者もいる。他者と話し合ったり他者の考え方を知ったりすることで、自分の価値観や将来についてたくさんの刺激を受けられるようになっている。	

<審査委員からの評価コメント>

- 教育界へのヒアリングから得た教育ニーズと自社の得意分野である「クリエイティビティ」を活かした総合型のプログラムを広範な学生に提供し、経営トップの承認の下で、グループ会社も含めて全社を挙げて取り組んでいる大規模なキャリア教育。
- 関心の高い生徒・学生を対象にしたものから、多くの参加者を募るものまで多彩なプログラムを用意し、首都圏のみならず、地方圏の自治体や学校との連携も図り、実施回数も多い。
- クリエーターが講師となり生徒・学生の自由な発想を大事にしている点は、学校での指導で積極的に関わってこられなかった部分であり、クリエイターからのアドバイスは、生徒・学生が働くためのヒントとなる。
- コミュニケーション能力や発想力、課題解決型の思考力など、社会人基礎力として必要な能力を醸成するプログラムとなっている。また、自分の特徴、夢や目標、好きを仕事にするなど、自己理解やキャリア形成に直接関わるものが多く、生徒・学生が自ら職業選択などを考える好機となっている。
- 専任担当者を置くなど、運営体制がしっかりしており、実施前の準備、実施後のフォローアップ調査、評価も十分行われている。

経済産業大臣賞（中小企業の部）

企業・団体名	認定特定非営利活動法人キーパーソン21
プログラム名	<p>「夢！自分！発見プログラム」シリーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演プログラム「おもしろい仕事人がやってくる!」：約50分 ・ワークショップ1「すきなものビンゴ&お仕事マップ」：約110分 ・ワークショップ2「コミュニケーションゲーム」：約110分 ・ワークショップ3「かっこいい大人ニュース」：約210分 ・少人数制ワークショップ「個別アクションプログラム」：約240分/2日間
活動の内容 (概要)	<p>キーパーソン21という言葉には「21世紀を担う子どもたちの心の扉のかぎを握る人」という意味を込めており、身近なところでいきいきと仕事をして生きている大人たちとちょっと出会い、社会との接点を持ち、視野を広くもち、自らの未来に思いを馳せて夢や希望や自信がわいてきて、すべては自分自身からはじまるんだ、ということに気づいてくれる人が一人でも増えてほしいとの願いがある。</p> <p>子どもたち一人ひとりが個性や多様性を認め合い「自信をもって、自分らしく生きる力」を育むために、多様な大人が全力で子どもたちの成長を支える活動を行っている。</p> <p>保護者や教師だけでなく、＜主役は子ども、きっかけは大人＞を合言葉に、シニア、社会人、大学生など様々な大人たちと関わることで、子ども一人ひとりが持っている「らしさ」や「特徴」を引き出し、それらを社会とつなげて考えたり、ありのままを認め自信につなげる、独自に開発した「夢！自分！発見プログラム」を展開している。2000年設立以降、実施校/施設は100を超え、35,000人以上の小中高校生がプログラムを受講した。</p> <p>自分の生き方を考え、自立した大人になるプロセスにおいて「自分を知る」「社会を知る」「自立する」ステップが必要である。自分軸（自分らしく選択する力）が無いと、社会を知っても、溢れる情報に何を選択していいのか戸惑ってしまう。そこに、第三者である大人が真剣に関わりながら「自分を知る」ステップを踏むことにより、自信を持って、主体的に社会を知り関わるができる。同時に「自分を知る」ことは、変化する社会の中で自分らしく生きる力を育む原動力（わくわくエンジンと呼んでいる）を見つけ出す行為でもある。こうして社会と関わりたいと思う意欲と、自分らしく生きる力を育む原動力を発見することで、一人ひとりの主体性を生み出している。</p> <p>2015年度は682名の大人が、3,684名に学校授業のなかでプログラムを届けた。</p>



ワークショップの導入挨拶

気合いを入れて、大人から児童/生徒に挨拶をします。大人の元気さと、このプログラムで児童/生徒と向き合うことへの本気度を伝えます。

児童/生徒には、こんなことも言っていいたいという自己解放を促すため、大人が個性豊かなデモンストレーションを行った後、児童/生徒の取り組みが始まります。



ワークショップ：「すきなものビンゴ&お仕事マップ」

個人ワークの後、チーム対抗で、わくわくすることに関連する仕事を広げていく様子。多いチームでは200個を超えることもあり、児童/生徒の柔軟な思考、発想の豊かさに大人が感心させられます。

このあと、書き出した仕事を踏まえて、個人ワークに戻り、自分とさらに向きあいます。

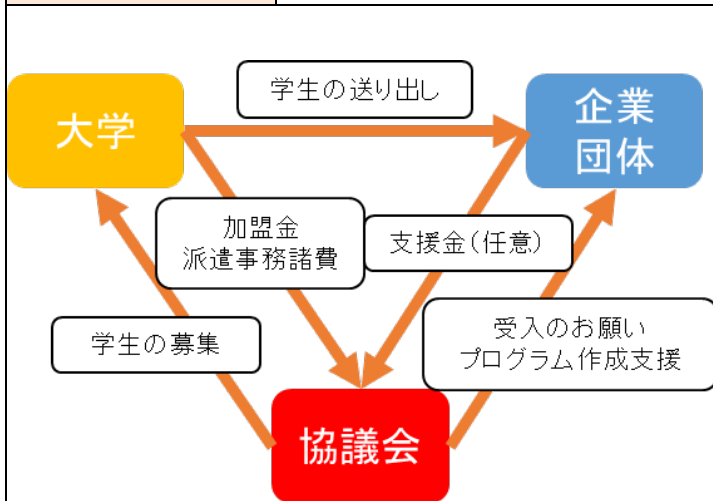
活動の内容 (詳細)	「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>毎年1校1学年につき、1～2つのプログラムを実施しており、その際にはプロジェクト化してリーダーを配置し、明確な責任のもと、事務局全体で年間のプロジェクトに取り組んでいる。</p> <p>キーパーソン21の個人会員のうち、各プログラムに参加するための講座受講者が、「わくわくナビゲーター」と称するプログラム提供者として毎年200名程登録しており、これまでに839名が登録している。また、活動を支援する企業のうち、「企業の子ども応援プロジェクト」に参画した企業の社員150名程が、事前の研修を受講してプログラムに参加している。</p> <p>プログラムの質/効果測定/改善にも努めており、児童・生徒やわくわくナビゲーターによる実施前後の記録や教員による実施後の記録などに基づいて、プログラムの内容、運営面での振り返りを行い、よりプログラムに集中し、学習効果を出すための環境作りに役立っている。</p>
	「普及性」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>実施地域は、関東、東海、関西地域で開催し、団体が育成したプログラム提供者がそれぞれの地域で実施する体制を構築し、地方の団体と連携する取り組みも強化している。また、団体が開発し学校の現場で実施している各種キャリア教育プログラムの質を落とすことなく、多くの児童・生徒に提供するための仕組みとして、プログラム提供者を育成するための養成講座(体験・座学・講義を含め全1.5日間)を開講している。</p>
	「汎用性」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>学校側の年間スケジュール、総合学習計画を踏まえ、児童・生徒に必要なプログラムの選択と時期目途について擦り合わせを行っている。プログラムは45分授業/50分授業など学校の時間割に合わせており、学校の要望などにより、質問タイムを加えたり、職場内見学を追加するなどして柔軟に対応している。</p>
	「企画性」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>ワークショップは、一方的に情報を提供するのではなく、保護者でも先生でもない、初めて出会う多くの大人が、真剣に児童/生徒に向き合うという非日常のなかで、児童/生徒自ら考え、第三の大人が伴走する形で関わることによって、自分を知り、自分に可能性を感じ、同時に社会を知り、主体的に社会と関わろうとする意欲の醸成の機会を提供している。</p> <p>各プログラムは、達成目標などを明確にし、一人ひとりが主役となるようゲーム性要素を盛り込んだアクティブ・ラーニングの手法により提供している。全てのワークショップは、一人ひとりが考えだした自分の発言や書き出したことが答えとなり、全てが受容されるプログラムとしており、社会で活躍する大人によって認められる経験を経て自己承認され、自分とほかの人の違いを知り、認める機会を提供している。</p>
「キャリア教育としての教育効果」についての具体的な取組、工夫している点など	
<p>ワークショップ形式でグループが協力して学習し、自分で考えて、自分の言葉で相手に伝えるようしており、その体験の中でプログラム提供者が温かい眼差しで真剣に参加することによって自己承認されることで、自信を持ち主体性が生まれ、今の自分の興味から、自分軸で将来について考えられるようになる。そこに色々な大人が関わることで、社会を知りたいという意欲が醸成され、多様な仕事を認識できるようにしている。</p>	

<審査委員からの評価コメント>

- 実施対象校、プログラム支援企業参加企業実績が多く、小中高校生の幅広い年代層を対象に、多数の関係者を巻き込んだ仕組みを整備したプログラム。
- 子供たちを飽きさせない構成となっており、親や教師以外の大人から直接学べる良質なプログラム。キャリア教育の基本的な形となるプログラムを提示しており、児童・生徒のキャリア発達を促すベーシックな形での始動が進められる。
- 「キーパーソン」の名のとおり、多方面との結びつきにより多くのステークホルダーとの連携・協働を広げる仕掛けに特徴があり、学校・学生を持つニーズに合わせた多彩なプログラムが提供され、汎用性も高い。
- 社会と関わるために、「自信をもって、自分らしく生きる力」を育むというアプローチは、近年低下が問題視されている自己肯定感の向上に資する。
- 毎年、確実に実施できるノウハウが蓄積されており、プログラム提供者に対する養成講座も開設されている。
- 多様な大人がいることを知り、主体的に自分の生き方や未来を考えることは児童・生徒にとってよい刺激となり、自分を見つめ、職業理解、自己理解に資する。

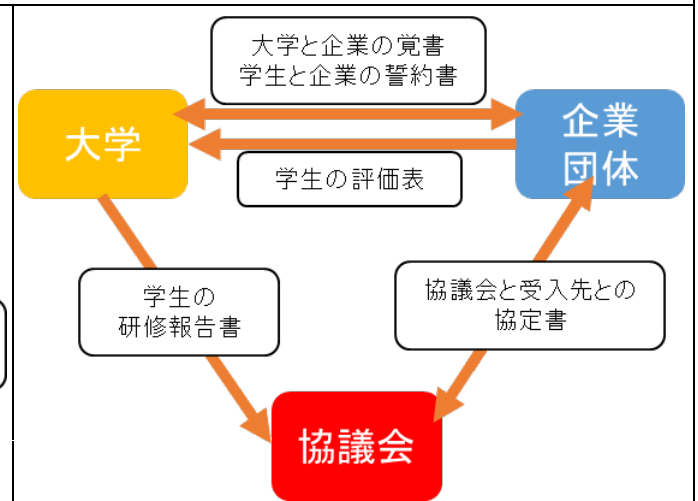
経済産業大臣賞（コーディネーターの部）

企業・団体名	一般社団法人九州インターンシップ推進協議会
プログラム名	インターンシップの推進
活動の内容 (概要)	<p>産学官の連携で経済団体が事務局としてインターンシップを推進。行政予算に依存しない形で運営を行い、地域の大学、企業から幅広く支援をいただいている。受入先は大企業、中小企業、NPO、行政機関、研究機関など多岐に渡る。事前・事後研修会で学生のインターンシップの学びの深化、大学担当者との定期的な意見交換、受入企業へのプログラム作成支援などを行っている。情報交換会の開催や各種セミナーでの講演、新聞広告等を通じての広報活動もやっている。現在、協定書を締結している受入れ先は500の企業・団体を超え、年間を通じて約300の企業・団体でインターンシップを実施中。毎年夏期インターンシップ終了後の10月に大学の学生窓口担当者（就職課やキャリアセンター等）の方々との会議を実施。インターンシップ実施中のトラブル報告、意見交換等を行い、今後のインターンシップ運営における改善に役立てている。国の方針や大学・学生に関する情報を提供したり優良な受入れプログラム事例を共有し、各企業における受入れプログラムの作成支援を実施し、実習内容の質の維持・向上を図ることで、より教育効果の高いプログラムとなるよう留意している。担当者会議と情報交換会では企業・大学双方のアンケート結果を公表し、インターンシップ推進における産学の相互理解に努めている。</p>



【支援・連携体制】

当協議会から企業・団体等へ受入の依頼を行い、学生の受入体制を確保し、大学へ学生の募集を行う。マッチングは事務局においてより公平を期すため機械的なルールに乗っ取り実施。その後学生を送り出す。大学からは加盟金とマッチング決定一人当たり1万円の派遣事務諸費、企業からは任意の支援金をいただき、運営費に当てている。



【教材・ツール、手法】

学生のインターンシップ実施において様々な書類を交わす。

実施前には協議会、大学、受入先の3者で協定書、覚書、誓約書を交わし、責任体制の明確化をする。実施後には受入先から大学へ学生の評価表を送る。単位認定されている大学では評価の参考となる。大学から協議会へ学生の記入した研修報告書を提出してもらい、学生の満足度の調査や受入先へのプログラム改善などに役立てる。

活動の内容 (詳細)	「有効性」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>学生向け事前・事後研修会を開催している。事前研修会はインターンシップに参加するにあたっての心構え・マインドセットや基本的なビジネスマナー等を指導する。また、他大学生との交流を通じてのワークを行い他者とのコミュニケーションを図ったり、インターンシップに参加する目的意識を形成することを狙いとしている。夏期に3回、春期に2回を100～300名規模で開催中。事後研修会ではインターンシップでの気づき・学びの振り返りを行い、その経験を今後の学生生活に活かすことができるように指導を行う。他大学生や社会人とのワーク・発表を通して、インターンシップの経験を確実に根付かせることを狙いとしている。夏期・春期共に1回を100～350名規模で開催。また、約20～50名のインターンシップ受入企業等から社会人にお越しいただき、参加学生1人1人へのアドバイスを行っていただいている。</p> <p>4～7週間の中期実践型インターンシップを実施。長期間かつ深い業務に携わることで、社会人基礎力などの汎用的能力の向上、専門教育の実質化を目指して取り組んでいる。当協議会のコーディネーター（専門人材）が学生のフォローとインターンシッププログラムの作成等を行っている。</p>
	「支援実績」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>登録約540社中、毎年春夏合計約300社へ30大学から約1000名ほどの学生をインターンシップへ送り出している。より多くの学生にインターンシップを経験してもらうため公平で機械的なマッチングルールに基づき、統一したスケジュールでマッチングを行っている。</p>
	「産学の関係構築への貢献」についての具体的な取組、工夫している点など
	<p>毎年、加盟大学と受入企業・団体双方へアンケートを実施。その結果を大学担当者会議（大学の就職課やキャリアセンター等担当者が出席）と受入企業・団体情報交換会（受入企業担当者が出席）にて公開、学生を送り出す側と受け入れる側の相互理解促進に役立てている。</p>

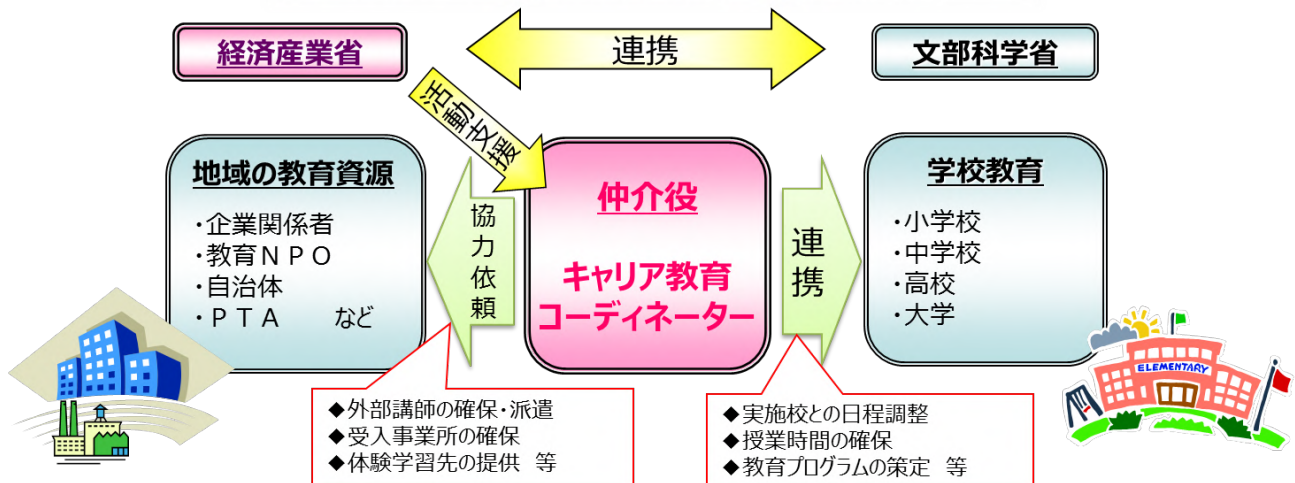
<審査委員からの評価コメント>

- 行政予算や補助金に依存せずに、大学や企業からの支援で自立した質の高いインターンシップ支援の在り方を確立しており、他の地域でも運用しやすいコーディネート例。地域の経済産業に貢献できる人材づくりは地域創生の基本であり、こうした取り組みを全国に広げるためのモデルとなる。
- インターンシップの重要性や教育的価値がより認識されるなか、組織的に、効率的にそのコーディネートを進めており、地域の大学や企業・事業所に根差した形で、統一したスケジュールにより域内の学生をインターンシップに送り出す体制を構築している。
- 手間のかかる大学生のインターンシップ事業を長年続け、多数の関係者に事業趣旨の浸透を図り、大学生、短大生のインターンシップ実績ともに、企業数学生の参加者数が多数にのぼっていることは評価できる。
- 事後研修会においてインターンシップで得た気づきや学びの振り返りを行い、経験を学生生活に活かせるよう指導を行っている点は、インターンシップの意義を良く理解している。
- 事前事後研修会、受入れ企業等からのアドバイス、コーディネーターのフォローやプログラムの作成などきめ細かい仕組みを構築。

経済産業省によるキャリア教育への取組 ～キャリア教育コーディネーターの育成支援～

地域・社会の持つ教育資源の活用のため、地域・社会と学校との仲介役として「キャリア教育コーディネーター」の育成を支援（平成17～22年度）。
キャリア教育コーディネーターの育成・認定等を担う民間団体として平成23年1月に「一般社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会」(<http://www.human-edu.jp/cccec>)が設立され、現在約270名のコーディネーターが全国で活動を行っている。

「コーディネーター」を置いたキャリア教育支援のイメージ

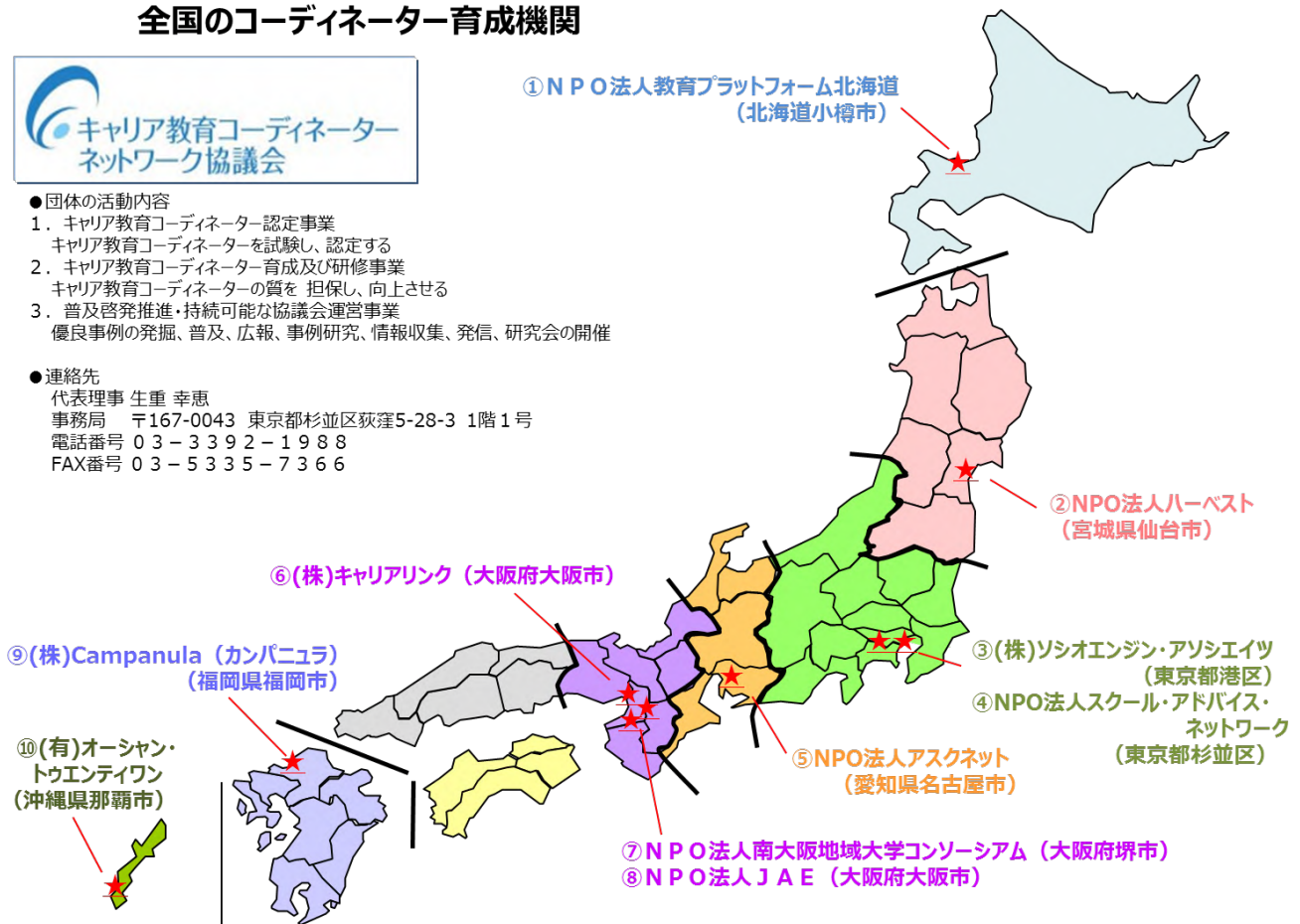


(参考) キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会認定の 全国のコーディネーター育成機関



- 団体の活動内容
 1. キャリア教育コーディネーター認定事業
キャリア教育コーディネーターを試験し、認定する
 2. キャリア教育コーディネーター育成及び研修事業
キャリア教育コーディネーターの質を担保し、向上させる
 3. 普及啓発推進・持続可能な協議会運営事業
優良事例の発掘、普及、広報、事例研究、情報収集、発信、研究会の開催

- 連絡先
代表理事 生重 幸恵
事務局 〒167-0043 東京都杉並区荻窪5-28-3 1階1号
電話番号 03-3392-1988
FAX番号 03-5335-7366



各部門のエントリー事例

- 大企業の部
- 中小企業の部
- コーディネーターの部

大企業の部 優秀賞

企業・団体名	<p>キヤノングループ内 8 社 キヤノン(株) / キヤノンマーケティングジャパン(株) / キヤノンプレシジョン(株) / キヤノン化成(株) / 長浜キヤノン(株) / 大分キヤノンマテリアル(株) / 日田 キヤノンマテリアル(株) / 宮崎ダイシンキヤノン(株)</p>
プログラム名	「モノの『とくちょう』を利用してリサイクル ～理科は地球を救う～」
活動の内容 (概要)	<p>キヤノングループは「共生」を企業理念としている。こうした社風のもと、環境問題(ゴミや資源問題)に対する企業の取り組みを将来の世代に伝えたいとの思いから、2011年にこの出前授業を開始した。学生が、明るい未来を担う上での課題として環境問題を受け止め、自分の力でそれを解決できると気付けるように、全国の小学校を舞台に活動している。</p> <p>この授業では、環境問題やリサイクルの要点を学習後、リサイクル実験を行う。磁石につく、水に浮く/沈むなど、モノの特徴を上手く利用することで混合材料が分けられることを体感できる。実験後、キヤノンのリサイクルラインをビデオで見学し、学校で習う知識が実社会の企業活動と直結していることを知る。</p> <p>また、この授業では、アクティブ・ラーニングの手法を多く取り入れ、学生が、考える・相談する・知識を活用する等の汎用能力を培う機会を多く設けている。</p> <p>中学校での実施も要望されたため、来年1月より、内容の高度化をはかって中学校へも活動の場を広げる予定である。</p>



授業の様子1
実験前の講義(環境問題、リサイクルについて)





授業の様子2
リサイクル実験

＜審査委員からの評価コメント＞

- 90分というコンパクトな枠組みで、企業社員によるリサイクル実験と企業でのリサイクルラインのビデオ学習を組み合わせたプログラムにより、生徒が環境に配慮した企業の生産活動、社員の仕事、学校で学ぶ知識との関わりを学習することができ、企業理解、職業理解につながっている。
- 環境問題に特化して学校が取り上げやすいテーマをグループ全体で全国的に取り組んでいる点を評価。「講師認定制度」などを設けて、教える社員のスキルアップを図ることで、持続性を確保している。
- 講師認定制度や講師研修会で知識を得た社員からの「課題の提示」「思いの呼びかけ」等は大人との隔たりのある児童にとって、価値観形成の大きなヒントとなる。
- 授業で学ぶことが、社会生活とどのように関連しているのか実験を通じ意識できるため、学習意欲の向上につながると思われる。また、4～5人の少人数での実験のため、生徒同士が自然と対話しながら主体的に課題や解決策を考え、協働し、個々の児童がグループ内での役割を担えるようにしている。

大企業の部 優秀賞

<p>企業・団体名</p>	<p>富士通株式会社</p>
<p>プログラム名</p>	<p>環境出前授業 ① 「将来のシゴトとエコ」～キャリア教育×環境教育～ ② 「地球1個分で暮らすために」～エコロジカル・フットプリントから考える～ ③ 「パソコン分解を通して学ぶ私たちの3R」 ④ 「環境カードゲームMy Earthを通して学ぶ地球環境問題」</p>
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>富士通グループは、未来を担う子供たちに「年々深刻化する地球環境問題とその原因を知ってもらい、解決するために出来ることを考え、行動する力を養ってもらう」ための支援として、全国の小中学校を対象に「環境出前授業」を実施している。</p> <p>「将来のシゴトとエコ」は、環境に配慮した現在の仕事を紹介するだけでなく、将来にわたる問題解決を取り入れた出前授業である。「将来仕事に就いた後も自分たちにどんな環境活動ができるか？」という長いスパンで環境問題の改善を考えることに重きを置いた授業構成としている。タブレットPCの開発・製造から販売までに関わる4つの仕事（研究、設計、製造、販売）とそれに携わる人の映像教材で、各工程で実施している環境に配慮する行動を紹介。その後、自分がなりたい職業を通して「どんな環境活動の取り組みができるか？」を考える。なお、このプログラムの特徴は、一人1台のタブレットPCを使って、子供たちが講師の質問に答えたり、他の人の意見を比較したりしながら授業を進めることである。積極的に発言できない子供たちも主体的・対話的に学ぶことを実現している。このプログラムを含む全ての出前授業は、当社社員がスタッフとなって授業を運営し、講師には、「養成講座」を受講しOJT研修を経て、試験に合格した社員を派遣している。</p>
	
<p>「将来のシゴトとエコ」や「地球1個分で暮らすために」では、一人1台のタブレットPCを使って、講師の質問に答え、他の人の意見を比較しながら授業を進行する。タブレットPCに書かれた意見は、スクリーンへ投影され、教室全体で共有できる。出前授業であっても、参加するすべての児童・生徒が主体的・対話的な学習をすることができるようにしている。</p>	<p>「将来のシゴトとエコ」では、児童の考えた「将来なりたい仕事を通じて環境問題をどのように解決するか」について、富士通社員がコメントを付与。優秀な回答内容は、ホームページ上で公開し、児童・生徒の学習意欲の向上を図っている。</p>

＜審査委員からの評価コメント＞

- 学校単独では実践しづらい内容を学習指導要領に沿って学年ごとに焦点化し、学習者に気付きを提供できる取組となっている。また、環境教育を基盤としてキャリアを考えられる取組で、小学生から中学生までの発達段階に合わせた継続的な指導ができる。
- 一人一台のタブレットPCを活用してグラフに意見が反映され、視覚的に他者との意見を比較できるので、発言が苦手な生徒も参加しやすい。
- 講師養成講座によりプログラムのレベルを確保し、複数のプログラムを用意している。

大企業の部 奨励賞

企業・団体名	東京ガス株式会社
プログラム名	『東京ガス学校教育支援活動』 (1) 学校への出張授業 (2) 先生向け研修会 (3) エネルギー・環境に関する情報提供
活動の内容 (概要)	<p>東京ガスは、エネルギーに携わる企業として“未来を担う子どもたちにエネルギーと環境の大切さを伝えたい”という想いのもと、2002年より学校教育支援活動を実施している。当社員が行う出張授業では、エネルギーと環境の関わりについて教科や単元に合わせて児童生徒に直接訴求し、先生向け研修会では、エネルギー・環境問題を授業で扱う動機づけと支援を行うことにより、教員がエネルギー・環境問題を主体的に扱う授業の普及拡大に努めている。</p> <p>2011年の震災を機に、生きるうえでエネルギーは不可欠であることが再認識され、教育現場におけるエネルギー教育への関心も高まりを見せている。現在、当社では「エネルギーを知ることはより良く生きることである」という考えに基づきこの活動を推進しており、エネルギー・環境問題は「自ら問題を発見し答えがひとつに定まらない課題の解を見出す諸能力」の育成、すなわち次期学習指導要領の柱のひとつであるアクティブ・ラーニングの実践に適したテーマのひとつと考えている。また、エネルギー・環境教育は、教科横断的かつ体系的な授業編成が可能であり、カリキュラム・マネジメントの観点からも有効な教育手法と捉えている。</p> <p>エネルギー基本計画に記述された「エネルギー教育の推進」は、持続可能な社会の実現とは不可分であり、「次世代に対するエネルギー環境教育を通じた“生きる力の育成”への貢献」という社会的責務の一翼を、今後も担い続けていきたい。</p>



■出張授業「暮らしを支えるエネルギー」
2015年宇都宮市内小学校での出張授業の様子。





■教員の民間企業研修(10年経験者研修)・グループワーク
3日間の研修の最終日に行う「授業プラン作り」では、エネルギー・環境問題について子どもたちにどう伝えるか考えます。(2015年8月)

＜審査委員からの評価コメント＞

- 首都圏を中心に10年以上続けられており、長年の経験でコンテンツのブラッシュアップが図られ、更なる改善も期待される。身近な素材から気づきを促すプログラムになっている。
- 児童・生徒向けに限らず先生向け研修会を実施しており、広く教育的支援を進めるプログラムとなっている。学校教育と広くコラボレーションできる内容であり、環境教育を手がかりにキャリア教育に切り込んでいる。
- エネルギー・環境問題と履修内容を組み合わせ、実験等を積極的に実施することで、学習意欲を高め、「考える」「伝える」ことを効果的に学習できるプログラムとなっている。
- 児童・生徒の理解を促すために、体験型プログラムを導入し、学習意欲の向上を目指す工夫が見られる。

大企業の部 奨励賞

企業・団体名	大日本住友製薬株式会社	
プログラム名	「科学技術と人の幸せ」	
活動の内容 (概要)	<p>【背景】 生命関連企業である製薬会社の役目として、次世代を担う中高生に『いのち』の大切さを考える」時間をもつ機会を与えたいと考えたため。</p> <p>【目的】 生命や倫理など、正解が一つではないテーマに対して、他人の意見や、自らと異なる考えを受け入れながら自分だったらどう判断するのかを考え、豊かな感性と優しさを持って自分なりの意見を導き出す「道徳的実践力」の育成を目指す。</p> <p>【方法】 当社のプログラムは学校教員と当社社員講師とのコラボレーション型授業で進める。授業進行のプロである教員が基本授業を進め、社員が製薬会社ならではの視点で解説を行う。</p> <p>最新の科学的な視点で遺伝子を調べることで何かわかるか、わかってしまうのか事例をあげて紹介する。その後、遺伝子検査にまつわる架空の動画「未来のカルテ」を視聴。内容はフィクションで、妻と二人の子どもを持つ40代男性が将来、不治の病になるか判別する遺伝子検査を受ける or 受けない を悩む内容である。生徒は、主人公になった立場で自分だったら検査を受ける or 受けない をメリット、デメリットから考え、自らの答えを導き出す。グループになって自分の意見を伝え、他人の意見を聴く。自分とは異なる意見も受け入れ、答えを出す。</p> <p>最後に、社員が生徒の発表に対してコメントし、この先の人生で『いのちの選択』を迫られた際、様々な視点で物事を考え、他人の意見も聴き、その時最良の答えを導き出してほしいことを伝える。</p>	
	<p>遺伝子検査を「受ける」か「受けない」の個人の答えを出している瞬間。手を挙げているのは「受ける」と判断した生徒。一斉に挙げさせることで時間の短縮を図る。</p>	
	<p>自分なりの答え（遺伝子検査を「受ける」か「受けない」）を出した後、グループになって他人の意見を聴く。その際に講師が様々なケースを生徒に問いかけている様子。</p>	

<審査委員からの評価コメント>

- 「遺伝子検査を受ける、受けない」という家族の葛藤を動画化して中高生に見せ、多様な意見を引き出すアクティブ・ラーニングの手法が採られており、この年代に「いのち」を考えさせることは重要であり評価。
- 社員は業務としてアサインしており、製薬会社としての特色を活かして、「命の大切さ」という視点からキャリア教育を進めている。
- 生命倫理に関わる難しいテーマで教育支援に関わる点は挑戦的であるが、生き方を考える上で、生命尊重は道徳的にも重要な価値がある。生徒の発達段階により難しい側面もあるが、指導を進めなければならない内容。

大企業の部

企業・団体名	JAIMAサマーサイエンススクール実行委員会
プログラム名	一般社団法人日本分析機器工業会(JAIMA)主催 中・高校生向け分析機器体験講習会「JAIMA サマーサイエンススクール」
活動の内容 (概要)	<p>近年、日本人のノーベル化学賞、物理学賞、医学・生理学賞受賞者が多数輩出し、日本の基礎研究が国際的に高い評価を受けていますが、その一方で、将来を担う若者の理系離れが危惧されています。幼い頃、誰もが一度は興味を持つ宇宙の不思議や自然界の摂理に対する興味や素朴な疑問は、多忙な生活の中で薄れていってしまうようです。JAIMA サマーサイエンススクールは、中高生にこうした自然界への興味や疑問をより身近に感じてもらうために、分析機器を自分で操作して身の回りにある試料を分析してもらう企画です。</p> <p>分析機器の体験講習会「JAIMA サマーサイエンススクール」を2012年7月より、毎年日本科学未来館で開催しています。この催しは、中学・高校生のみなさんに実際に分析機器を操作体験してもらうことで、様々な産業を支える基盤となっている分析機器・技術について理解を深め、科学技術への関心を高めてもらうことを目的としています。</p>



JAIMA サマーサイエンススクール開催要旨説明の様子。

学習者64名に対して、実施要綱を説明しているところです。これから1グループ3~4名に分かれて、分析機器の体験学習が開始されます。どの分析機器が体験できるか、学習者も緊張と期待感があふれています。



グループ学習の様子。

JAIMA サマーサイエンススクール協力企業による「卓上電子顕微鏡」の学習です。試料は「葉や花粉」など学習者が親しみやすいものに特化しています。学習者は「大学の研究者」と同じように、卓上顕微鏡を自由に操作する事が出来ます。科学に対する興味を一層誘う学習内容となっています。



大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>株式会社CBCテレビ</p>
<p>プログラム名</p>	<p>CBCテレビ出張授業</p>
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>CBCテレビでは、東海地方（愛知・岐阜・三重）の小中学生を対象に申し込みのあった学校に出向き、子ども達が『いろいろなメディアの中から正しい情報の選択』ができるよう支援する、メディアリテラシーに関する出張授業を行っています。また、東南海地震が起こると言われている地域であるため、いざという時のために『命を守る』という観点から、災害報道に関するメディアリテラシーも養えるよう工夫しています。</p> <p>講師はCBC解説委員・CBCアナウンサーで、「メディアの特徴を知り情報をうまく活用する」ことをテーマにした授業では、子供たちに身の周りには、どんな情報があるのかを考えるように促し、情報を伝えるもの全てがメディアであることを認識してもらいます。その上で、それぞれの特性や、上手な使い方などを一緒に考えます。また、「災害報道」についての時間では、災害時の各メディアの役割を知るとともに、いざという時にいかに行動するかを考える力を身につける内容となっています。さらに、夏休みには教員を対象としたメディアリテラシー勉強会を開き、一人でも多くの子供たちがメディアについて考える機会に繋がるよう、教員がメディアについてより深い知識を得る機会としました。</p>
	<p>メディアにはどんなものがあるのか？ どんな特徴を持っているのか？ それぞれの長所と短所はどんなところか？ などを自由に考え発表。 必ずしも正解のある質問ではないので、子供たちの自由な発想は大人も一緒に考える機会になります。</p>
	<p>災害報道の授業で、住んでいる地域のハザードマップを見ながら確認したうえで、感じたことを発表。 ハザードマップはデータにすぎず、必ずしも安全を保証する地図ではないこと、いざという時には何をすべきかなどを、一緒に考えます。</p>


大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>株式会社島津製作所、株式会社島津ビジネスシステムズ</p>	
<p>プログラム名</p>	<p>環境学習出前授業 「生物多様性」「ゴミとリサイクルの話」「水のお話」「私たちの暮らしと気象」 4テーマで実施</p>	
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>島津製作所は環境活動において、3つの柱を中心に活動を展開しています。3つの柱とは、</p> <p>①技術開発を通じて地球規模で環境改善を図ること。②製造業としてCO2 排出や廃棄物排出などの環境負荷を低減すること。③社外の環境活動の支援を行うことです。</p> <p>社内の環境保全のノウハウを社外に活用することで、より広く地球環境保全に寄与できるとの認識から、活動を社外の環境活動支援に広げてきました。</p> <p>特に小学校に出向いての環境学習出前授業は、2001年2月から開始し、2015年3月末現在で116回開催し、7120人以上の参加が得られております。現在は、「生物多様性」「ゴミとリサイクルの話」「水のお話」「私たちの暮らしと気象」のメニューを用意し、座学や実験だけではなく、子供達に遊び感覚で環境保全の知識を習得してもらうべく、オリジナルの環境学習支援ツール（双六・カードゲーム等）を作成し、授業を行っています。学校カリキュラムにはない企業独自の目線での授業で、好評を得ています。</p>	
	<p>2015年11月13日 気象予報士による 「私たちの暮らしと気象」 の環境学習出前授業</p>	
	<p>環境学習支援ツール 絶滅危惧種を学ぶカードゲーム 「bidi」</p>	

大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>株式会社ダスキン</p>
<p>プログラム名</p>	<p>学校掃除教育支援活動 ～みんなでつくろう キレイをいっしょに～</p>
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>株式会社ダスキンでは「喜びのタネをまこう」の経営理念を实践すべく、「次世代を担う子どもたちに、掃除の大切さを伝えたい」「掃除を通して子どもたちの力を伸ばしたい」そんな想いを込めて「お掃除の会社」としてお役立ちできる教育貢献活動に取り組んでいます。</p> <p>2000年の活動開始から、学校現場のニーズに応じて活動を充実させ、16年目となる現在は</p> <p>①「出前授業 キレイのタネまき教室「おそうじについて学ぼう！」</p> <p>② 教員向けセミナー「子どもたちの力を伸ばす学校掃除セミナー」</p> <p>③ 授業で使える学校掃除プログラム・教材の無償提供 を実施しています。</p> <p>活動の大きな特徴は、2011年、質の高い教育支援活動を継続するための講師の研修制度「学校掃除サポーター制度」を確立し、ダスキン本部と加盟店とが一体となって全国展開を実現する体制が整っていることです。</p> <p>また、①の出前授業プログラムについては、基本編となるSTEP1「掃除をする意義と掃除用具の使い方」に加えて、教員が苦手とするトイレ掃除の手順を中心にした新プログラムSTEP2を開発。さらに毎年増え続ける学校からの出前授業のご要望にお応えできない場合に備え、教員が自立的に実施できる新たな教材提供版「ワークブック申込版／おそうじじょうずになろう！」を開発し、提供を開始するなど、活動を進化させ続けています</p> <p>そして、2016年4月、「ダスキンお掃除教育研究所」へと組織名を変更、今後も掃除を通じた教育（学校／社会／家庭）分野での活動強化を目指していきます。</p>
	<p>小学校向け出前授業 キレイのタネまき教室 「おそうじについて学ぼう！」</p> <p>STEP1</p> <p>どうして掃除をするのか、掃除の必要性や意義を考えた後に、掃除用具の正しい使い方を学びます。</p> <p>なぜその使い方がよいのか、講師がわかりやすく解説し、実習をすることで、児童の理解が深まり、学校や家庭での掃除への意欲を高めます。</p>
	<p>教員向けセミナー 「子どもたちの力を伸ばす学校掃除セミナー」</p> <p>掃除時間を「子どもたちの力を伸ばす時間」として活用するためにはどうすればよいのか、改めて見つめなおす教員向けセミナー。</p> <p>学校掃除の基礎知識についての理解を深めたり、グループで「理想の教室掃除」の計画を立て、実習を行ったり、体験活動を中心としたセミナー構成で、学校掃除について楽しく理解を深めていただきます。</p>

大企業の部

企業・団体名	コニカミノルタ株式会社	
プログラム名	新入社員による出前授業 「理科離れをくいとめ、キャリア教育を支援する社会貢献活動」	
活動の内容 (概要)	<p>新入社員全員が参加する社会貢献活動。 理科離れという社会課題に目を向け、ものづくりの企業として貢献したいとの思いで、メイン事業の「コピー機」と関連のある活動を企画・実施。「コピー機」と「静電気」の関係を例に、学校の授業で学ぶことが世の中で実際に役立っていることを理解してもらうことで、理科や科学への興味・関心を高めていきたい。同時に、学生に一番年が近い社会人である新入社員から進路選択や学ぶことの意義等自身の体験を元にアドバイスを送ることで、キャリアについて考えるきっかけづくりとしたい。</p> <p>【目的と狙い】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 理科や科学に興味を持ってもらうこと 2. 学校の授業で習う事が世の中で役立つことを知ってもらうこと 3. 会社とは？働くこととは？を知ってもらうこと <p>を目的に、下記の効果を狙っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 普段接している先生とは違った視点で企業人が授業を行うことで、子ども達の理科・科学への関心が一層高まることを期待 ● キャリアについて考えるきっかけづくり <p>また、社内的には新入社員研修として、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ものごとをわかりやすく伝える工夫を考えること 2. 目標を設定し、メンバーと共有し進めていくこと 3. 計画を立て、本業務に影響のないように時間管理をしながら効率良く進めていくこと <p>を通して、下記の効果を目指している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● プロジェクト推進、プレゼン能力の向上 ● 世の中に役立つ活動を通じての企業人としての誇りを芽生えさせる機会 	
		<p>● 実験風景</p> <p>生徒が現像ローラーでカラートナーを載せ、絵を描いているシーン。各班には社員（左の白ジャンパー）が一人以上付いてきめ細かく指導を行う。使用するコピー原理実験装置はオリジナル制作。</p>
		<p>● キャリア教育風景</p> <p>生徒に一番年が近い社会人である新入社員が、自身の体験を元に、進路の話や働くことなどをメッセージとして送る。</p> <p>質問にもその場で答えていく。</p> <p>話す人、話す内容は学校／先生のニーズを把握した上で決定している。</p> <p>幾つかメニューを用意しておいて、生徒の希望に合わせて行うこともある。</p>

大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>広島ガス株式会社</p>
<p>プログラム名</p>	<p>こどもエネルギーACT I O N!!! 「スーパーサイエンスミュージアム」～未来のノーベル賞受賞をめざした育成～</p>
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>“広島ガスがつくるエネルギーは好奇心です”という理念のもと、「こどもエネルギーACT I O N!!!」と銘打って、子どもたちの好奇心を育て、それを契機に実社会で役立つ知識と技能の習得につなげることを目的とした教育活動を推進している。</p> <p>具体的には、科学教育、エネルギー・環境教育、食育、火育、防災教育の分野で、小・中学生を対象とした広範囲に及ぶ体験型の講座や出張授業を実施。その中でも、科学教育分野の「スーパーサイエンスミュージアム」プログラムでは、科学に興味を持つ子どもの力を伸ばし、未来の日本を支える技術者の育成につなげようと、小論文や面接で選抜された受講生（小学5・6年生）を対象に、学習指導要領の内容を踏まえた上でさらに高度な科学実験講座を2003年から開始し、本年で14年目を迎えた。実施に当たっては「学・官・産」が連携したプロジェクト形式により広島ガスが委員長・事務局を務めて運営する。</p> <p>プログラムでは、座学だけではなく実験や体験を通して、科学の不思議や奥深さに触れ、子どもたちの中に豊かな探究心を引き出す。同時に実践的な学習により、問題解決のための必要な情報の収集などを行う思考力、集めた情報を取捨選択する判断力、仲間とコミュニケーションを図る表現力を育成。夢と希望を持ち、身につけた知識や技術を実社会で生かすことのできる人材を育てることを目標として活動している。</p>



「養老先生と春の山を歩こう」
講座の様子より。東京大学名誉教授養老孟司氏を特別講師として招き、おおの自然観察の森(宮島の対岸に位置する自然観察の森)において、自然観察の講座を行った。日本最少のトンボ「ハッチョウトンボ」やモリアオガエルの卵塊など、大変珍しいものを観察することができた。





「化学実験大集合」講座の様子より。広島ガス技術研究所のスタッフが講師となり実施した、2010年にノーベル化学賞受賞 北海道大学 名誉教授 鈴木 章 氏の“鈴木カップリング”反応の再現実験の様子。

大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>テュフ ラインランド ジャパン 株式会社</p>
<p>プログラム名</p>	<p>夏休みガールズデー エンジニアを体験！安全な製品について考えてみよう！</p>
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>理系キャリア推進を目的とし、テュフ ラインランドジャパンのテクノロジーセンターにて、小学校5・6年生の女子児童を対象に安全試験にかかわる講義、試験施設見学（ラボツアー）、ワークショップを行っている。小学校児童のより身近な相談相手として、共催の電気通信大学から女子学生が派遣され、産学で連携し経験の場を提供するとともに、こうした活動の重要性を広く認知することの一助となることを目指している。</p> <p>企業からの教育内容に加え、共催の電気通信大学の女子学生から伝えられる大学教育についての情報、知識が子供たちの今後の進路決定、学習プロセスに良い影響を与えることを期待している。参加証明書（認証書）授与式では、「家の中にある認証マークを2つ見つけてください」という子供たちへの宿題を提案し、家庭での「安全」にかかわる意識の向上についての啓発を試みている。</p>
	<p>《試験施設見学の様子》 実際のデモンストレーションと実験を含む見学はおよそ1時間をかけて、8箇所の安全試験施設を見学した。 (写真はEMC試験用10m電波暗室)</p>
	<p>《ワークショップの様子》 第1部の安全試験の講義と第2部での試験所見学を通して、実際の試験設備を見た後に、製品開発者となってベビーカー開発と安全試験の種類について考えるワークショップを行った。</p>

大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>公益社団法人全国求人情報協会</p>
<p>プログラム名</p>	<p>「お仕事ブック」作成プログラム</p>
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>全国求人情報協会は、求人情報の適正化事業、求人情報等に関する調査研究事業などを行う公益社団法人であり、求人情報を扱う企業で構成されています。現在、新卒学生を含めた求職者のうち約3分の1が、求人情報メディアを通じて求職活動を行っています。当協会は、求職者に求人情報が正確かつ適正に提供されるよう活動しています。</p> <p>我々が持つ「さまざまな仕事情報」やその「やりがい」「その仕事に就くための必要となるスキル」などの知見を児童に伝えることで、彼らの「仕事をする力」「社会に出るための基礎的な力」を伸ばすことができると考え、キャリア教育プログラムを推進しています。</p> <p>プログラムは4ステップで構成されています。</p> <p>Step1 の事前授業では、協会の会員企業の社員が出張講師となり、「仕事について知る」をテーマに授業を行います。授業は児童参加型のグループワークがメインとなります。</p> <p>Step2 は、児童による自主学習です。学校の方針により、仕事研究か体験学習をお選びいただけます。</p> <p>Step3 が『お仕事ブック』制作です。仕事研究や体験学習をもとに、児童が原稿を作成。実施企業が製本をいたします。</p> <p>Step4 にて取材内容の発表ワーク。完成した冊子を使い、児童が研究・取材した内容について発表をします。</p>
	<p>東京都板橋区公立小学校での授業風景 協会の会員企業の社員が出張講師となり、世の中にある仕事について説明した。</p>
	<p>出張講師の集合写真 児童が将来について真剣に考えるきっかけづくりができ、講師も大きなやりがいを感じている。</p>

大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>日本生命保険相互会社</p>	
<p>プログラム名</p>	<p>中学生・高校生向け～将来について考えよう～ キャリア教育・社会人交流プログラム～丸の内から描く私のみらい～</p>	
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>少子化・高齢化等の社会環境の変化に伴い、子どもたち一人ひとりに将来について考え、きり拓いていく力が求められる中、それを応援したいとの思いで当社職員が講師となり、中学生・高校生向けに参加型授業「将来について考えよう」を、次の3つの取組を軸として行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 出前授業では、講師として当社職員が学校を訪問し、進学・就職・結婚・老後といった将来迎えるであろうライフイベントについて、社会環境の変化・必要資金の観点から解説する。 ② 受入授業では、生徒が当社を訪問し、出前授業の内容に加え、お客様来店型店舗の見学や、先輩社会人との座談会により、社会に出ること・働くことを考える機会を提供している。 ③ 2016年度からは株式会社 JTB コーポレートセールスとの協業により、修学旅行のなかに「受入授業」を組み込む、『キャリア教育・社会人交流プログラム～丸の内から描く私のみらい～』を新たに開始。当取組では、当社丸の内ビルにおいて、通常の「受入授業」に加え、従業員食堂での当社職員との夕食交流会や、未来の自分へ宛てた手紙を作成する。修学旅行という一生に一度の特別な場に取り入れることにより、生徒たちが自分自身の将来、社会に出ることをより具体的に考える機会を提供している。 	
	<p>(先輩社会人との座談会)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日本生命 & JTB～丸の内から描く私のみらい～での座談会の様子 ● 基本の授業を終えたのち、各班に1名当社職員が入り、仕事のやりがいや人生の転機について、自分自身が経験した成功談・失敗談を交えて紹介 ● 少人数形式を活かして、生徒からの質問に1つずつ回答、自由に意見交換を実施 	
	<p>(出前授業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 進学・就職・結婚・老後といった将来迎えるであろうライフイベントについて説明する ● 授業はスライドをもとにワークシートを用いて進めていく形式で、途中でクイズやグループワークも行い、生徒に意見を発表してもらう時間も多く設けている 	

大企業の部

<p>企業・団体名</p>	<p>東京ベイ信用金庫</p>	
<p>プログラム名</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・千葉県立市川昂高等学校「金融教育」 ・東海大学付属浦安高等学校中等部「金融教育」 ・千葉商科大学「当金庫における個人取引推進について」 	
<p>活動の内容 (概要)</p>	<p>地域と協働して行う社会貢献活動は、相互扶助・非営利という信用金庫の特性を活かしつつ、会員でもある取引先の身の丈・ニーズに合った地域密着型金融への取り組みが必要であり、そのような活動を目指しています。</p> <p>また、そういった各種サービスの提供等の役割を適切かつ持続的に進めていかなくてはならないと考えています。</p> <p>前述のようなことに加え、地域の幅広い年齢層に対して、根ざした活動を提案していくとともに、当金庫として補えない部分を、中央機関・業界団体の機能を活用したり、県・市等の地方行政機関と連携していくことが必要です。</p> <p>今後も、当金庫自身が、自らの身の丈にあった活動として地域に対し、持続的かつ継続的に貢献できるものと考え、費用をかけずに地域力を連携させ活動しています。</p> <p>当金庫は、社会貢献活動の柱として、「金融経済教育」の実施を考え活動を開始しました。</p> <p>平成20年度に千葉県立市川工業高校において、「金融経済教育」を地元警察署やNPO等と連携して協働で実施したことを皮切りに、スタートしました。</p> <p>その後、関東財務局や関東経済産業局や千葉県や市川市と協働して「セミナー」等実施してきました。</p>	
	<p>千葉県立市川昂高等学校で、東京ベイ信用金庫の新入職員が、高校1年生に向けて、信用金庫に就職した動機を先生に質問されているところです。</p>	
	<p>東海大学浦安高等学校中等部の3年生に向けて財務省関東財務局千葉財務事務所の職員が財務事務所の仕事について、説明しているところです。</p>	